

# 青春の定時制高校

龍口 宏

父が三八歳の若さで病死したため、昭和二八年、中学校卒業と同時に、兄の呼掛けで汽車に乗り上京した。末子で小心者である私は、母と兄姉の陰に隠れて後ろから付いていく頼りない性格。兄と同居ながら伊那弁丸出しの十五歳が、未知の世界に立った。

朝食抜きで京王線の上北沢駅から新宿で乗り換え国鉄の田端駅まで、ラッシュアワーに揉まれる時点から一日の戦いが始まった。

職場の上司である竹村職長は遠戚に当たり、母が依頼し入社した七〇人ほどの会社。給料は日給月給で月四千円を切った。国会で社会党の浅沼稲次郎書記長が、だみ声で最低賃金八千円を提案していたが、現実ばなれした金額に思えた。

昼食は便利なコンビニのなき時代であるから限られており、コッペパン十円をバターかジャムを塗ると十五円二個を毎日、食した。ときには盛そば二十円にしたが、コッペパンを毎日毎日うんざりする程に続けると、栄養不良で頭がボーッとし、夢の中でコッペパンに追い掛けられそうになった。

工場が終業すると残業の人達に氣を使いながら、勉強嫌いであったが近くの高校の定時制に通学した。当時からも学歴社会で、私立の定時制だが三クラス百五十人が入学した。戦後八年、生活に余裕がなく働き学ぶ社会人であり学生で、授業料は月千円だった。

定時制で全日制の高校と違っていたのは、廊下にバケツの灰皿がある。年齢が様々で中卒即入学は三割位で七割は年上で、十代が中心だが二十代も三十代もいて、三十代は私の倍であるから「おじ小父さん」の感じ。

授業の合間に旨そうにタバコを吸う年上の人。新中卒者は他愛なくプロレスの真似をしたが、バケツの周りの雑談は興味深く、話題はエロ話もあったが、仕事の内容や賃金の格差を知った。

バケツ場は世の中のルールを聞いたりコミュニケーションがとれて、年齢差はあるが好きな場所になった。(一年後にはバケツの前で、むせながらタバコを吸う私がいる。)

学校が終業すると、昼食後、十時間の空腹を抱えて、夕飯を新宿の通称、小便横丁(現在、思い出横丁)に急いだ。横丁は居酒屋が中心で現在の倍の店があり、怪しげな店やチンピラもあり、最初は怖かった。毎夜、通ううちに慣れたが、チンピラに因縁をつけられないよう不良ぶく歩くことにした。その恰好は滑稽だったであろう。

兄に教わった夕飯の店は看板がなく天井一品だけで、衣がやけに大きい玉ねぎのみの天井で、米飯の店は一軒しかないと毎夜と寄った。美味い不味いよりも満腹になればよかった。店内は日焼けした労働者ばかり。

間借りの家に帰る頃は、深夜になり寝静まり台所の裏口から静かに入る。大家一家とは襖一枚で仕切られ、寝言も溜息も聞える状況だが、疲れているので直ぐ熟睡した。

朝、起きるといつ帰ったのか横の蒲団に兄が居り、会話する時間もなく駅に走った。十五歳の体は骨格が大人に成り切っておらず疲労が激しく意志も軟弱だ。全てにゆとりがない惰性の日々が続いたが、反抗期があったはずだが……。例え反抗期であろうと不満、不安をぶちまける相手は、誰もいなかったから自分自身で呑みこむ外なかった。

せめて駅からの帰り道で、月に向って「俺を救えるなら救ってみろ！」吠えた。だが一向に状況は変わらなかったのが、私の希望も喜びもない疲れ果てた青春時代であった。

一年が経って工場、学校、住居の中で、心が休まる所は学校である。勉強嫌いなので自分でも意外だが授業そのものでなく、バケツの周りに集まる働き学ぶ同じ境遇の仲間達との心の触れ合いだった。

担任で社会科の木下教師は初老で世の中の表裏を、わきまへ知る人物で「新聞を読む読め」を常に強調した。「知識を広めるために新聞を読むこと。一面も読む社説も読む、解らなくても読む読め！」口癖のように授業中くどいくらいに繰り返している。

ラッシュアワーでスポーツ面と四コママンガを重に目を通していたが、一面、社説も読むようにした。だが、理解できず、解るには時日が必要であった。その後、読むのが習慣になり「新聞を読む読め」は、私の将来に大きな影響を与えた。

ある日ホームルームで木下教師は、

「会社も教室も挨拶が大切だ。クラスの委員長を兼ねた『起立、礼、着席』の号令係を決めたいので、誰が適任か全員で選びなさい」

委員長は私に関係ないが、はじめがついていいいいと思い、誰が相応しいか皆の顔色を窺う。

バケツ場仲間で親しい国鉄の田端操車場勤務の岡本さんが突然に、

「出席率のいい龍口君を推薦する」皆の顔が私に向いた。予期せぬ事態に驚き、

「ちょっと待って待ってくれ！」この場をどう逃れるか頭が混乱しおかしな弁解をした。「田舎では、いや、小中学校であらゆる長をやった経験がない。豚に餌をやる当番の僅か四人の班長さえもなれなかった。ですから委員長は無理です」木下教師は、

「号令係が重で豚に餌を上げるときと同様に大声を出せばいい。龍口君に拍手をもつて以て決定しよう」全員が拍手した。

自宅から通い衣食住が満たされた人も居る中で、何ぞ私なのか考え込む……今の状況は光の射さない毎日、打開の道を探すが策がなく心はやけ自棄気味だ。初めての長は喜ぶべきだが、直面している現実が生やさしくはない。

バケツ場は好きで陽気に見えたかも知れないが、長に繋がるとは思いも寄らなかった。

月に向って吠えても無視されるが如く実生活は、兄以外に頼れる人は誰もいないと思っていた。だが、見返りなんぞ全く期待せずに、私の境遇を同情し情けを掛ける他人がいるのを徐々に知りつつあった。

貧しい日常に慣れた頃、風邪をひき高熱と震えで通勤途中から、工場に電話し休みにして風邪薬を買い間借りの家に戻った。

日頃、避けていた大家のお婆さんが心配し、冷たい水枕と手拭を用意し、キャベツの葉が熱を下げるらしく額にのせた。お婆が、お粥を作ったり真夜中に手拭を何度も替えてくれた。今まで敬遠したのを恥じた。

その夜、兄は帰って来なかった。

三日目の日曜日の朝に快復し食欲旺盛になったが、想定外の高い風邪薬を買ったため文無しだ。兄に状況を知らせたいが多分、連日の徹夜麻雀であろうから連絡の方法がない。

腹がぐうぐう鳴るが、ただ、ぼんやりと湿った裏庭を眺めていた。

縁側に古新聞が積まれており横に広告のチラシが、風に吹かれて激しく揺れている。チラシなら風で飛ぶはずだが、なぜか飛ばない。

気になるのでガラス戸を開けて見ると、オモチャの五百円札がある。私をからかっているのか……。札を取ろうとすると丁寧にも糊で貼ってある。腹立たしく札を手にした——ところが、肌触りからオモチャの紙幣でなさそうだ。本物だ！本物の五百円札だ。

誰がどうしてタイミングよく腹ペコの私に。

有り難い五百円のぬし主は、私の部屋の前に札を貼った故に、私に渡す目的であつたはずだ。そして、近辺に知合いが居ないから間違いない家中の人に限られる。誰であろうか。

家中には兄は不在。他に間借り人は二人で、一人はOLのオールドミス、私が挨拶しても挨拶を返さない無愛想な女。婚期を逃しているのは、その辺のマナーが原因であろう。私に同情する人間性ではない。又の一人はお人好しの左官職だが、競輪狂で一つだけの布団を質入れするほどの金欠で、お金に縁遠い男。

残る大家一家は四人。お婆の孫の中学生と高校生は対象外。戦死した息子の嫁の未亡人は働いているが、お婆に一家の権限が託されている……となると、お婆だ！慈悲ある五百円の主は、お婆に間違いない。

戦争で息子を亡くし嫁と共に孫二人を成人にすべく一家の柱。間借り人が酒酔いでさわいだり家賃を滞納したりを、監視し注意しなければならぬ強い心の持主だ。

一方で切り詰めた生活から他人までにも手を差し伸ばす人情味。小心の私に気配りし直接に渡さず間接に縁側に置く手段は、繊細で豊かな心の持主である。お礼の仕方が分からぬままに、心の中で深く感謝した。

今日の勤務は力仕事だったので、空腹の余り高校へ行く前に、そば屋に入った。木下教師がおり同じテーブルに座った。



「新聞、読んでいるかい」

「はい、読んでいますが社説は難しいです」

「そのうち解る。君の得意な学科は何かね」

「勉強嫌いで得意なものはありません」

「いや有る。誰にも有る。まだ若いから年数を掛けて興味があるものでもいい、初めての職業で安閑とせず、色々と経験して得意を探すことだ」と言っ、私の盛そば代も支払って頂き先に店を出ていった。

恩師の教えを守り新聞を読む事により視野を広めたが、情けなくも得意は中々に見出せなかった。恩師は私の頭脳を平均以上と判断したようだが、正直なところ以下なのである。そこら辺りが得意を見出せない原因かも知れないと思うが……。

定時制高校のときの会社は、六年間在職したが倒産した。その後、七社を渡り歩き十五歳からの経験で、実戦には自信を持ちつつ得意を探し求めた——そうした中で、ふと、立ち止まり考えると、今まで職業に結び付けなかったが、読書好きで活字が好きであることを……「これだ」と思い、その業界を調べ行動に移した——

二四歳のとき小さな業界紙で基礎を学び、二五歳で大手業界新聞社に入社した。職場は希望通りでなかったが、十分に切磋琢磨するセクションで、定時制高校からの労苦がやっと適えられた。

恩師は「新聞を読む読め」を強調したが、まさか新聞社に入社するとは、天国で苦笑しつつも喜んで頂いていると思う。感謝。

龍口 宏

(たつのくち ひろし)

一九三七年東京生まれ 七十七歳

長野県の伊那谷に疎開し山吹中学校卒業

さいたま市中央区在住